

Ⅲ 教学組織

看護学部・看護学科

【在籍者】

収容定員に対する在籍者数

(2010.4現在)

学 年	収容定員	現 員 数	休学者数 (内数)	留年者数 (内数)
1 年	60	86	0	1
2 年	80	96	0	1
3 年	80	90	0	0
4 年	80	91	1	0
計	300	363 (121.0%)	1 (0.3%)	2 (0.6%)

【入学者】

学 部

《 》…男子内数

	学部一般	推 薦 (帰国生を含む)	学士編入学	科目等履修生
募集要項配布期間	2010年8月～ 2011年1月	2010年7月～11月	2010年7月～9月	2011年2月～ 2011年3月
願書受付期間	2010年12月20日～ 1月17日	2010年10月18日 ～10月25日	2010年9月 3日 ～9月10日	2011年2月16日 ～3月 2日
募 集 人 員	60 (推薦15名程度を含む)	15程度	20	各科目若干名
志願者数(倍率)	467 (7.8倍) 《21》	34 (2.3倍) 《0》	77 (3.9倍) 《10》	3
受験者数	449 (7.5倍) 《20》	34 (2.3倍) 《0》	72 (3.6倍) 《10》	3
合 格 者 数	1次試験 169 《5》 2次試験 80 《2》	15 《0》	20 《1》	3
補 欠 者 数	49		3 《2》	
入学者数	56 《1》	15 《0》	20 《2》	3

【卒業生】

	学部一般	編入生
卒業生数	69	21
入学時人数	70	20
上級から加わる	3	1
下級へ下がる	2	0
退学	2	0

【平均修得単位数】

平均修得単位数（学士編入生を除く）

		卒業所要 単位数	平均取得 単位数	最高取得 単位数	最低取得 単位数
教養科目	教養科目		23	40	18
	外国後科目	10	10	13	10
	小計	28	34	52	28
基礎科目		31	32	32	32
専門科目		69	72	77	69
総計		128	137	161	129

【国家試験結果】

国家試験結果

	受験者 (名)	合格者 (名)	合格率 (%)
保健師	90	84	93.3
看護師	90	90	100.0

【看護学部科目等履修生】

科目等履修生開講科目および履修者数

	授業科目	単位数	履修者数	単位修得者数	単位未履修者数
前期	心理学	2			
	生涯発達論Ⅱ	2			
	家族関係論	2			
	集団力動論	1			
	看護提供システムⅠ	2			
	看護技術論	1	1	1	
	生涯発達看護論Ⅰ	2			
	学校保健	2			
	養護概説	2			
	看護研究Ⅰ	2	1	1	
	看護ゼミナール（がん看護）	1			
	看護ゼミナール（遺伝看護）	1			
	看護ゼミナール（老年看護）	1			
	看護ゼミナール （老年期の看護援助に関する文献学習）	1			
後期	教育方法の研究	2			
	教育制度論	2			
	カウンセリング概論	2			
	教職総合ゼミ	2			
	ヒューマンセクシュアリティ	2			
	地域看護論Ⅰ	2			
	急性期看護論Ⅰ	3	1	1	
	看護政策論	2			
	看護研究Ⅱ	3			
			計	3 (100%)	0

【実習施設】

2010 年度実習施設一覧表

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
1	看護援助論Ⅳ	1	聖路加国際病院	31	臨地実習G	3	江戸川区小岩健康サポートセンター
2	臨地実習A	2	聖路加国際病院	32	臨地実習G	3	中野区中部保健福祉センター
3	臨地実習A	2	済生会横浜市東部病院	33	臨地実習G	3	中野区北部健康福祉センター
4	臨地実習A	2	神奈川県立こども医療センター	34	臨地実習G	3	中野区南部保健福祉センター
5	臨地実習B	2	聖路加国際病院	35	臨地実習G	3	中野区鷺宮保健福祉センター
6	臨地実習B	2	東府中病院	36	臨地実習G	3	港区みなと保健所
7	臨地実習C	2	聖路加国際病院	37	臨地実習G	3	おもて参道訪問看護ステーション
8	臨地実習D	2	聖路加国際病院	38	臨地実習G	3	浅草医師会立訪問看護ステーション
9	臨地実習E	2	永生会永生病院	39	臨地実習G	3	医師会立中央区訪問看護ステーション
10	臨地実習E	2	救世軍ブース記念病院	40	臨地実習G	3	医師会立品川区訪問看護ステーション
11	臨地実習E	2	ブース記念老人保健施設グレイス	41	臨地実習G	3	セコム駒込訪問看護ステーション
12	臨地実習E	2	介護老人保健施設リハポート明石	42	臨地実習G	3	セコム世田谷訪問看護ステーション
13	臨地実習F	2	東京武蔵野病院	43	臨地実習G	3	セコム新宿訪問看護ステーション
14	臨地実習G	3	杉並区荻窪保健センター	44	臨地実習G	3	セコム吉祥寺訪問看護ステーション
15	臨地実習G	3	杉並区高円寺保健センター	45	臨地実習G	3	セコム練馬訪問看護ステーション
16	臨地実習G	3	杉並区上井草保健センター	46	臨地実習G	3	練馬区医師会立訪問看護ステーション
17	臨地実習G	3	杉並区高井戸保健センター	47	臨地実習G	3	自由が丘訪問看護ステーション
18	臨地実習G	3	豊島区池袋保健所	48	臨地実習G	3	すみだ訪問看護ステーション
19	臨地実習G	3	豊島区長崎保健相談所	49	臨地実習G	3	東京白十字訪問看護ステーション
20	臨地実習G	3	練馬区石神井保健相談所	50	臨地実習G	3	板橋ロイヤル訪問看護ステーション
21	臨地実習G	3	練馬区豊玉健康相談所	51	臨地実習G	3	白十字訪問看護ステーション
22	臨地実習G	3	練馬区関保健相談所	52	臨地実習G	3	あすか山訪問看護ステーション
23	臨地実習G	3	足立区竹の塚保健総合センター	53	臨地実習G	3	訪問看護ステーションけせら
24	臨地実習G	3	足立区江北保健総合センター	54	臨地実習G	3	訪問看護ステーションみけ
25	臨地実習G	3	千代田区千代田保健所	55	臨地実習G	3	訪問看護ステーションけやき
26	臨地実習G	3	中央区日本橋保健センター	56	臨地実習G	3	訪問看護ステーションさぎそう
27	臨地実習G	3	中央区中央区保健所	57	臨地実習G	3	城北訪問看護ステーション
28	臨地実習G	3	中央区月島保健センター	58	臨地実習G	3	東電さわやか訪問看護ステーション中野
29	臨地実習G	3	江戸川区中央健康サポートセンター	59	臨地実習G	3	訪問看護ステーション芦花
30	臨地実習G	3	江戸川区葛西健康サポートセンター	60	臨地実習G	3	岩本町訪問看護ステーション

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
61	臨地実習G	3	新みさと訪問看護ステーション	73	総合実習	2	永生会永生病院
62	臨地実習G	3	河北杉並訪問看護ステーション	74	総合実習	2	川崎市立井田病院
63	臨地実習G	3	すみれ訪問看護ステーション	75	総合実習	2	東芝ヒューマンアセットサービス(株)保健支援事業部
64	臨地実習G	3	桜台訪問看護ステーション	76	総合実習	2	小鹿野町保健福祉センター
65	臨地実習G	3	訪問看護ステーション北沢	77	総合実習	2	NTT東日本首都圏健康管理センター
66	総合実習	2	聖路加国際病院	78	総合実習	2	訪問看護ステーションあかし
67	総合実習	2	訪問看護ステーションパリアン	79	総合実習	2	助産婦石村
68	総合実習	2	東京武蔵野病院	80	総合実習	2	森田助産院
69	総合実習	2	聖路加国際病院訪問看護ステーション	81	総合実習	2	かもめ助産院
70	総合実習	2	共同作業所ひやしんす城北	82	総合実習	2	結核予防会結核研究所
71	総合実習	2	多摩たんぼぼ介護サービスセンター	83	総合実習	2	杏林大学医学部附属病院
72	総合実習	2	小竹メンタルサポート				

Class of 2010 (2011年3月卒業) 総合看護・看護研究Ⅱタイトル一覧

学籍番号	氏名	領域	指導教員	タイトル
07B01	浅野 晴子	基礎	佐竹 澄子	乳房ケアにおける里芋湿布導入の背景
07B02	池添 日菜	母性	五十嵐ゆかり	在日外国人への母子保健に関する情報発信の内容と評価
07B03	磯部 愛	廣瀬	廣瀬 清人	不登校児童・生徒の支援における認知行動療法的介入の有用性
07B04	市村真季江	母性	蛭田 明子	機械的モニタリングを用いた正常産児に対するカンガルーケアにおける、助産師の構造 —安全性と有効性の視点から—
07B05	今崎 葉月	教育	堀 成美	葬祭業者の業務における感染予防対策とエンパワーミングについての実態調査
07B06	上野 真実	基礎	蜂ヶ崎令子	病棟看護師における清拭動作時の姿勢と身体負荷の検討
07B07	大坪 清志	廣瀬	廣瀬 清人	闘病記、手記からみた、家を離れて死を迎える癌患者と死刑囚の死を意識しながら生きる者の心理についての文献検討を通しての比較分析
07B08	小形 優子	母性	蛭田 明子	NICU 長期入院児の退院に向けた看護師の関わり
07B09	小澤 絢名	中山	中山 和弘	Q&A サイトの投稿におけるデートDV の定義と認知度について
07B10	小野友貴奈	母性	有森 直子	子どもを持つことにより変化する夫婦関係への看護支援 — 文献的検討 —
07B11	河野優美絵	老年	山本 由子	糖尿病高齢者の食事療法に伴う食づくり行動での困りごとと看護師の役割
07B12	菊池 華奈	地域	大森 純子	20代女性のライフスタイルに合わせた子宮頸癌検診の受診促進方法に関する研究 —情報の周知方法及び受診方法に焦点をあてて—
07B13	京増あやめ	中山	中山 和弘	Twitterで禁煙を支援するiPhoneアプリ「禁煙なう」での発言からみた禁煙継続要因としてのつながりの状況

学籍番号	氏名	領域	指導教員	タイトル
07B14	黒白 夏妃	鶴若	鶴若 麻理	患者の宗教的ニーズとその表出を促す要因についての研究
07B15	小板橋 彩	教育	井部 俊子	看護学生が職場選択する際の意味決定プロセスと意思決定要因に関する研究
07B16	小西 咲	岩辺	岩辺 京子	知的障害者への性教育の現状と問題点、支援のあり方について －教諭へのインタビューからの考察－
07B17	小林 聡美	老年	梶井 文子	要介護高齢者のその人らしさへの配慮 ーおむつ交換に着目してー
07B18	小屋野幸呼	家族	有森 直子	先天性疾患親の会に看護学生が参加したことに対する親の体験
07B19	坂口 達哉	成人 急性期	卯野木 健	人工呼吸器バンドルの導入とそのコンプライアンスの VAP 発生率への影響
07B20	坂本和嘉子	母性	小黒 道子	NICU 退院児を育てる母親のニーズに対する訪問看護師の役割の検討
07B21	佐々木美麗	精神	瀬戸屋 希	リエゾン専門看護師の救命救急領域における自殺企図者に対するケアの現状
07B22	佐藤 繭子	中山	中山 和弘	医療報道における新聞と Twitter の反応の比較からみたソーシャルメディアの可能性 ー帝京大病院院内感染事件を題材としてー
07B23	眞田 和美	老年	梶井 文子	男性介護者に関する研究において明らかになっていることと今後の課題について ー要因・支援・虐待に関する文献検討ー
07B24	猿渡ゆかり	母性	小黒 道子	低出生体重児とその母親が NICU を退院する際に行われる母乳育児支援の現状と課題
07B25	白土 聡美	鶴若	鶴若 麻理	ALS 患者の人工呼吸器装着に関する意思決定と看護支援の検討
07B26	志波 美帆	国際	長松 康子	フィリピン都市部在住の HIV 感染者が抱える困難
07B27	杉岡 寛子	母性	片岡弥恵子	新生児へのビタミン K 投与に関するリーフレットの作成
07B28	鈴木 彩乃	成人 急性期	卯野木 健 四本 竜一	術前に実施する薬液シャワー浴の手術部位感染症予防の有効性に関する文献検討
07B29	鈴木ゆかり	国際	長松 康子	フィリピン都市部在住の HIV 感染者が抱える困難
07B30	高木 彩	岩辺	岩辺 京子	不登校児童生徒をもつ母親の心理的変化過程および望ましいサポートのあり方についての分析
07B31	高木 由希	鶴若	鶴若 麻理	カップルの出生前診断の選択という意思決定に影響する要因と倫理観に関する研究
07B32	高見沢 早	国際	長松 康子	フィリピン・マニラのスラム街における男性喫煙者の喫煙状況および意識調査
07B33	竹之内 優	地域	留目 宏美	発達障害を持つ児童生徒に対する養護教諭の個別的な関わり ー養護教諭へのインタビューからわかったことー
07B34	田淵 陽子	成人 急性期	御子柴直子 飯岡由紀子	わが国の遺族ケアの実態把握と課題の考察
07B35	藤平 実可	教育	堀 成美	東京都自治体ホームページの予防接種に関する情報提供の現状と今後の課題
07B36	徳田 里美	精神	角田 秋	看護師がパーソナリティ障害を持つ人との関わりにおいて重視するコミュニケーション方法 ー患者の状態に改善がみられた 7 事例の分析からー
07B37	長岡紗規子	中山	中山 和弘	インターネットで販売される HIV 郵送検査の利用者の声からみた普及理由と問題点
07B38	中村 真理	岩辺	岩辺 京子	日本の公立小学校に通学するニューカマー児童に対する養護教諭のサポート ー文献検討による考察ー
07B39	布谷なつき	精神	角田 秋	統合失調症をもちながら育児を行う人に対する地域での看護
07B40	野口 由布	成人 急性期	飯岡由紀子	看護における「傾聴」の文献的考察

学籍 番号	氏 名	領 域	指導教員	タイトル
07B41	野田 真澄	成人 急性期	卯野木 健	ICUに関連したうつ病の発症率とうつ病発症のリスクファクター －文献検討を通して－
07B42	萩原 伶奈	老年	亀井 智子	デイサービスに通う認知症高齢者の家族がスタッフに対して求めている もの：連絡帳の分析から
07B43	橋本千絵美	鶴若	鶴若 麻理	改正臓器移植法の臓器摘出要件に対する新たな提案 －自律性の尊重という観点から－
07B44	林 聖子	地域	留目 宏美	小学校における性教育の評価のあり方 －養護教諭へのインタビューから見えたこと－
07B46	平井小百合	教育	堀 成美	洗髪技術学内演習の必要性の検討
07B47	平木 彩子	成人 急性期	卯野木 健	ICU 退室後の患者の妄想的記憶の実態について －発生率及びリスクファクター－
07B48	平野 悠理	母性	小黒 道子	NIDCAP の日本での導入の実際と課題について
07B49	平原 詩織	菊田	菊田 文夫	自然体験活動における看護学部学生スタッフの学びの特性に関する考察 －聖路加親子キャンプの事例を通して－
07B50	藤田 祥子	管理	井部 俊子	病院に勤務する看護師が仕事と育児を両立させるために活用できる制度 に関する文献調査
07B51	古川 愛	教育	堀 成美	看護学生を対象とした子宮頸がんの意識調査 －子宮検診受診率向上のための考察－
07B52	細田 愛菜	精神	瀬戸屋 希	リエゾンナースの活動の実際と今後の可能性 －リエゾンナースの活動報告 14 件における文献検討－
07B53	堀内理恵子	精神	大熊 恵子	暴力行為により保護室での隔離を受けている統合失調症の患者の症状改 善に有効なコミュニケーション技術を中心とした看護介入の分析
07B54	堀江 千紘	国際	長松 康子	フィリピン・マニラのスラム街における男性喫煙者の喫煙状況および意識 調査
07B55	前田 緑	母性	實崎 美奈	妊娠期における緊急帝王切開の説明の必要性和その内容に関する文献検討
07B56	松本 真緒	岩辺	岩辺 京子	「睡眠」についての意識変容をもたらす保健学習の考察 ー生活実態調査 と授業実践を通じて (小学生児童編) ー
07B58	水木 優	母性	實崎 美奈	不妊治療後に双胎妊娠した女性の心理的特徴に関する文献検討 －各期において必要とされる看護の考察－
07B59	光成真理子	国際	長松 康子	フィリピン都市部のスラム街に暮らす子供たちの発育状況に関する研究
07B60	三宅 智子	成人 慢性期	大坂和可子	唾液分泌機能が低下している患者の唾液分泌を促進し、口腔内乾燥を予防 するためのケアに関する文献検討
07B61	宮本 彩	地域	小林 真朝	女性の産後再喫煙行動の要因と支援のあり方 －働く女性 2 名のインタビューを通して－
07B62	御代 晋平	菊田	菊田 文夫	親子キャンプにおける自然体験や世代間交流が参加者の成長に与える影 響について
07B63	村田麻喜恵	地域	小林 真朝	カンボジアの精神保健の現状と今後の課題を沖縄の精神保健の歴史と現 状から考える ーフィールドワークと文献検討からー
07B64	安田ゆり子	教育	堀 成美	義務教育における性教育内容の検討 －高校 1 年生へのアンケート調査から－
07B65	山口 侑美	地域	留目 宏美	欧米系在日外国人の結核検診受診困難に関する影響要因
07B66	山添 沙織	管理	井部 俊子	看護師のキャリアの多様性 ー看護師経験を活かせる認定資格についてー
07B67	横川 彩夏	母性	有森 直子	HPV および HPV ワクチンに関する情報の比較検討 －日本国内の関連機関ホームページおよび刊行物等の記述の分析を通して－

学籍番号	氏名	領域	指導教員	タイトル
07B68	横田 真理	成人急性期	池口 佳子 林 直子	クリティカルケアの場において家族の突然死を体験した遺族のニーズから考察する遺族ケア
06B51	藤井 まい	管理	井部 俊子	看護師のキャリアの多様性 ―看護師経験を活かせる認定資格について―
06B55	三浦 千佳	地域	大森 純子	P 県 Q 町における運動指導の実際と地域ケアシステムの課題 ―生活習慣病を持つ住民の保健行動支援に焦点を当てて―
06B59	百瀬 綾子	成人急性期	卯野木 健	ICUにおけるせん妄の実態と、せん妄発症のリスクファクター ―文献検討を通して―
08B71	相羽 有美	地域	小野若菜子	膵臓がんとともに生きる A さんの3年半の体験 ―闘病記の分析から―
08B72	泉 智子	地域	小野若菜子	自宅で死を迎える高齢者へのケアマネジメントにおける福祉職介護支援専門員の困難
08B73	岩下ひとみ	成人慢性期	飯岡由紀子	退院調整看護師の介入とその結果を踏まえた役割の文献的考察
08B74	歌城 歩	老年	山本 由子	日常型世代間交流における高齢者の役割（感）を支えるケアについての考察 ―日課を設けないデイサービス施設での試みから―
08B75	海老沢実樹	管理	野田由美子	韓国の保健診療員制度の変遷と日本の地域医療への適用可能性
08B76	岡本 幸子	中山	中山 和弘	アメリカ政府による、質が高くわかりやすい健康情報提供を通じた市民のヘルスリテラシー向上をめぐる動向
08B77	小田ちひろ	老年	亀井 智子	入院中の認知症高齢者の転倒要因の検討 ―インシデントレポートの分析から―
08B78	小野 絢子	成人慢性期	大坂和可子	ターミナル期にある独居患者の生活を支えるチームケア ―ボランティアを導入し、継続するための訪問看護師の支援―
08B79	金 有実	管理	野田由美子	韓国の保健診療員制度の変遷と日本の地域医療への適用可能性
08B80	里見 全代	基礎	伊東美奈子	パフォーマンスを生で鑑賞することから観客が受け取っている心理的効果
08B81	志沢 陽子	基礎	大橋久美子	採血に伴うネガティブな感情に対する援助モデルの有効性の検討 ―患者の対処方略と看護師の援助に注目して―
08B82	篠原 美穂	地域	小林 真朝	世代間交流に対する無限の可能性 ―住民同士の交流と文化をつむぎ、次世代に伝えていくこと―
08B83	清水 泉	中山	中山 和弘	Q&A サイト上の HPV ワクチンに関する質問と回答からみた情報ニーズと課題
08B84	杉森めぐみ	管理	野田由美子	外国の看護師資格の国際的相互認証制度と日本の現状
08B85	鈴木ちひろ	精神	大熊 恵子	リワークプログラムにおいて参加者のモチベーションに影響を与える要因についての考察 ―リワークで出会う「仲間」の存在に焦点を当てて―
08B86	千野 裕子	成人急性期	池口 佳子 林 直子	終末期がん在宅療養者の家族の介護負担感・介護肯定感に関する文献検討
08B87	濱田 千絵	成人急性期	卯野木 健 四本 竜一	ICUにおける呼吸理学療法の呼吸器合併症予防への有効性
08B88	山下 文	管理	井部 俊子 中村・野田	看護基礎教育におけるコスト管理の理解とその必要性
08B89	矢萩 裕子	地域	小野若菜子	終末期医療における看護師の死生観に関する文献レビュー
08B90	横山 仁美	基礎	大橋久美子	採血に伴うネガティブな感情に対する援助モデルの有効性の検討 ―患者の対処方略と看護師の援助に注目して―
07B77	熊倉 綾子	地域	大森 純子	自閉症児者の母親が経験する子育てのストレスと親育ちのプロセス ―手記の分析を通して―

【学部選択科目履修状況】

		授業科目	学年	人数
基礎科目	人間文化	キリスト教倫理	1年	3
		音楽	1・2年	6
		美術	1・2年	26
		文学	1・2年	開講せず
		哲学	1年	14
		倫理学	2・3年	4
		宗教学	2・3年	15
	人間社	歴史学	1・2年	11
		法学（日本国憲法）	1・2・4年	66
		教育原理	1年	60
		教育方法の研究	1年	35
		社会学	1年	61
		心理学	1年	22
		教育制度論	2年	13
		カウンセリング概論	2年	18
		教職概論	2年	12
		教育課程論	4年	11
		道徳及び特別活動論	4年	11
		生徒指導論	4年	11
		女性学	2年	35
	人間言語	国語表現法	2年	開講せず
		総合英語	1年	11
		英語Ⅲ一A	1年	11
		英語Ⅲ一B	2年	6
		文献講読A	2年	6
		文献講読B	3年	8
		英語表現法Ⅲ一S	2年	23
		英語表現法Ⅲ一W	3年	4
		異文化コミュニケーション	3年	37
		ドイツ語Ⅰ	1年	31
		ドイツ語Ⅱ	2年	6
		中国語	1・2年	10
人間情報	情報科学	1・2年	開講せず	
	統計学演習	4年	0	
人間自然環境	生物学	1年	15	
	物理学	1年	7	
	化学	1年	5	
体育	体育Ⅰ	1年	56	
	体育Ⅱ	1～4年	55	

		授業科目	学年	人数
門科目	合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）	1・2年	12
		総合科目Ⅲ（生活科学論）	1・2年	30
		教職総合ゼミ	2年	14
	看護基本	看護提供システムⅡ	4年	0
		看護技術論	4年	3
	人間作用	生涯発達看護論Ⅲ	4年	開講せず
		家族発達看護論Ⅱ	4年	15
	環境保持相強互化	地域看護論Ⅲ	4年	7
		学校保健	3年	10
		養護概説	4年	11
	人間環境修正	慢性期看護論Ⅲ	4年	0
		リハビリテーション看護論Ⅱ	4年	4
	人間作用環境回復相	急性期看護論Ⅲ	4年	65
	看護統合	看護研究Ⅱ	4年	80
		総合看護	4年	11
		看護ゼミナール（苦痛を伴う検査や処置を受ける子どもと家族の看護）	4年	7
		看護ゼミナール（遺伝看護）	4年	9
		看護ゼミナール（看護教育）	4年	0
		看護ゼミナール（国際看護）	4年	8
		看護ゼミナール（生活行動が障害された患者とその家族の看護）	4年	開講せず
		看護ゼミナール（老年看護学実践ゼミ）	4年	4
		看護ゼミナール（老年期の看護援助に関する文献学習）	4年	8
		看護ゼミナール（自校史演習）	4年	0
		看護ゼミナール（感染症看護）	4年	11
		看護ゼミナール（がん看護）	4年	19
養護実習Ⅰ		4年	11	
養護実習Ⅱ		4年	11	

【立教大学全学共通カリキュラム】履修状況

授業科目	履修者数
現代社会のと人間	2
心の健康	1
経済学の世界	1

【立教大学科目履修状況】

	前期	後期
開講科目数	110	118
履修科目数	3	0
履修者数	4	0
単位習得率	75.00%	

入試委員会

1. 構成員

[委員長] 及川郁子

[委員] 井部俊子、菱沼典子、麻原きよみ、田代順子、柳井晴夫、山口喜義（事務局）

[書記] 榎田智恵美（教務部）

2. 役割・職務

- (1) 聖路加看護大学入試委員会規程により看護学部入学者選抜の実施に関する事項を審議し、公正な方法で実施運営を図る。
- (2) 審議事項は、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）、入学者選抜方法の検討と選抜試験の実施、入学選抜に関する情報提供および情報開示、各委員（出題、校正、面接、採点）の人選、入学者選抜の統計、その他入学者選抜に関すること。重要事項は教授会の議を経て決定する。

3. 活動内容

- (1) 委員会は常設で定例会は原則毎月1回開催した。
- (2) 適切な入学定員確保に向けた入学者へのヒアリングと、育英奨学金による入学者10名に対するヒアリングを行った。育英奨学金については、他大学へ進学しないことの抑止力となったのは1名であった。
- (3) 推薦（帰国生を含む）入試の出願資格に「インタ

ーナショナルスクール」および「朝鮮中高級学校」が該当するか否かを検討した。2011年度は該当しないことになったが、来年度入試に向けて引き続き検討する。

- (4) 学士編入学試験における情報開示について周知した。また合否基準のランク・グループを整理し12月に情報開示を行った。
- (5) 一般入試の実施にあたり学力試験の休憩時間は科目間を30分間に拡大し、受験生へ配慮した。また聴覚障害のある受験生に対して次の特別措置をとった。
 - ①試験監督のアナウンスを書面で伝達
 - ②面接官はFM補聴器に連動したFMワイヤレスマイクを使用（本人持参）
 - ③試験場内待機係と面接場への誘導係を配置
- (6) 学士編入学「生物」と一般入試「生物」「化学」の入試問題で入試ミスがおきたため大学ホームページで受験生に周知し、文部科学省へ報告した。検証の結果、問題作成をマニュアル通りに行っていれば防止できたと思われる。今後は入試問題作成ミス防止策として「入試問題作成に関わる留意事項」に校正手順と出題形式を追加する。
- (7) 昨年の入試マニュアルに不足していた採点入力手順について記載し実施した。
- (8) 昨年まで教務部長と入試委員長の役割と責任の明確化が曖昧であったが、今年度は入試委員長が中心となって各入学試験を実施した。

4. 課題

- (1) 出題ミスを反省し防止策として「入試問題作成に関わる留意事項」の見直しと周知・徹底
- (2) 推薦入学者の出願資格ならびにフォローアップ方法の検討
- (3) 高等学校の平成25年度新学習指導要領の実施に伴う出題教科・科目の検討
- (4) 大学入試センター試験についての調査および検討

カリキュラム運用委員会

1. 構成員

[委員長] 麻原きよみ（サバティカル・リープのため9月～1月は菱沼典子教授が代行）

[委員] 伊藤和弘、菱田治子、菊田文夫、廣瀬清人、鶴若麻理、中山和弘、菱沼典子、田代順子、松谷美

和子（サバティカル・リーブのため9月～1月は欠席）、及川郁子、林 直子、飯岡由紀子、有森直子、亀井智子、萱間真美、井部俊子、岩辺京子、大森純子（麻原委員長がサバティカル・リーブ期間中出席）

〔書 記〕 教務部 高橋昌子

2. 役割・職務（カリキュラム運用委員会規程）

本学の教育理念のもと、現行の看護学部教育課程の運用および編成に係る事項について所用の審議を行い、必要あれば教授会に上程する。具体的には、以下のことを審議する。

- (1) 教育課程の編成に関する事
- (2) 授業科目および実習の実施に関する事
- (3) 時間割の編成に関する事
- (4) 前各号に係る評価に関する事
- (5) 単位の認定に関する事
- (6) 非常勤講師、臨時助教の採用に関する事
- (7) 学生の履修状況に関する事
- (8) その他教育課程に関する事

3. 活動内容

11回の委員会を開催し、例年の上記審議事項の他に、以下について審議を行った。

- (1) カリキュラム2011について検討し、最終案を決定した。それに伴い、カリキュラム改正の変更承認申請の調整および次年度から実施する新カリキュラムについて詳細を決定した。
- (2) 公衆衛生看護学実習の履修者上限を30名とし、選考基準や履修科目を決定した。
- (3) 新カリキュラムでの実習レベル目標について決定した。
- (4) 新カリキュラムにおいて、英語の公的試験による単位認定は、入学前に取得したもののみを8単位まで認定することに改正した。
- (5) 立教大学「人間と看護」の次年度以降の担当者を、各部門で1年ごとに持ち回りとすることを決定した。
- (6) 養護教諭二種免許状から一種免許状取得を含めた科目等履修生について検討し、養護教諭一種取得を目指す卒業生の科目等履修生を2011年度から実際に受け入れることになった。
- (7) インフルエンザの対応について検討し、通常の病気と同じ扱いとすることを決め、欠席扱いとしないとする記載を便覧から削除した。

また、風疹の抗体検査が（－）の場合、実習前に各自

予防接種を受けることを追加し、B型肝炎の予防接種やインフルエンザワクチン接種を実習前までに受けることを推奨する旨、便覧に加筆した。

- (8) 実習等の安全対策について、実習施設に教員がいる場合の対応について検討し、便覧に加筆した。

4. 課題

- (1) 昨年度課題となっていた、保健師国家試験受験資格選択者の上限、選考基準および履修科目について検討し決定したが、具体的な履修方法については、今後検討していく必要がある。
- (2) 養護教諭実習の実施時期について検討し、新カリキュラムでは9月に実施することに決定した。今後は実際に実施しながら不都合等がある場合は検討することとなった。
- (3) 養護教諭二種免許から一種免許を取得するための科目等履修生について検討を行い、詳細を決定し実際に受講生を受け入れることができたが、養護実習1単位の履修について、今後どのように実施していくか、さらなる検討が必要である。
- (4) 「情報科学」「生涯発達看護論Ⅲ」については、2011年度も開講ができなかった。新カリキュラムでは、開講できない科目がないよう、調整する必要がある。
- (5) カリキュラム2011の変更承認申請は無事終了し、新カリキュラムをスタートする予定であるが、2012年度から保健師助産師看護師学校養成所指定規則が改正となり、本年度もカリキュラムの変更承認申請が必要となるため、再度検討、審議を進めていく必要がある。

a. カリキュラム2011

1) 構成員

〔委員〕 麻原きよみ、松谷美和子、有森直子、飯岡由紀子、大森純子、小野智美、梶井文子、佐居由美、瀬戸屋希、廣瀬清人、長松康子、中村綾子

2) 役割・職務

2011年度から開始するカリキュラムを作成する。

3) 活動内容

8回の定例会議および7回の臨時会議を開催した。

また、カリキュラム2011の説明と意見交換、およびその結果をカリキュラム2011に反映するために、カリキュラム運用委員会の定例会議および臨時会議に計3回メンバーが出席した。さらに、ファカルティ・スタッ

フミーティングにおいて、全教職員対象にカリキュラム 2011 についての説明と意見交換を 1 回行った。2010 年 5 月にカリキュラム 2011 が完成し、教授会で承認された。それ以降は、実習の展開方法やレベル目標を検討し、結果をカリキュラム運用委員会に報告した。

4) 課題

2011 年度入学生から適用されるカリキュラム 2011 が混乱なくスムーズに運用できることが課題である。

b. 実習単位認定者連絡会

1) 構成員

[担当者] 佐居由美、小野智美、卯野木健、市川和可子、五十嵐ゆかり、山本由子、瀬戸屋希、小林真朝、長松康子

2) 役割・職務

レベル I、II の実習単位認定者による学生の指導に関する会議

3) 活動内容

定例会議 3 回、臨時会議 1 回の計 4 回会議を開催し、学生の実習指導および指導体制の整備について検討を行った。

- (1) 各実習における学生の学習状況を共有した。
- (2) カリキュラム 2011 に向けて各領域から意見を出し合った。
- (3) 実習オリエンテーションの方法および内容について検討した。
- (4) 達成度自己記入用紙レベル評価用紙の使用の実態と課題を検討した。
- (5) その他、実習上の検討課題について話し合いを行った。

4) 課題

臨地実習オリエンテーション内容の再検討。具体的には下記の通りである。

- (1) 教務部オリエンテーションの時期、担当者、内容の検討
- (2) オリエンテーションの内容で重複している箇所の再検討
- (3) 患者からの暴力やセクシャルハラスメントに関するオリエンテーションの時期と内容、担当者。また、それらを受けた学生に対するサポートシステムの構築

c. 臨地実習 II 担当者会議

1) 構成員

[担当者] レベル II の実習担当者全員

2) 役割・職務

レベル II の実習運営のための検討会議

3) 活動内容

4 月、6 月に会議を開催し、臨地実習に向けた準備と実習指導体制についての検討を行った。

- (1) 臨地実習オリエンテーションの内容について検討した。
- (2) 事前自己学習、および技術確認の内容と方法について検討した。
- (3) 実習レベル目標 II の達成度自己記入用紙が十分に機能していないため、内容と活用方法について検討した。活用方法を欄外に明記し、オリエンテーションを実施した。
- (4) 今年度より情報システム委員会から情報管理に関するオリエンテーションを実施した。
- (5) 聖路加国際病院新電子カルテシステムへの対応について検討した。

4) 課題

- (1) 実習の積み上げなどに関する全体的な内容のオリエンテーションを誰が担当し、いつ、何回実施するか
- (2) 臨地実習オリエンテーションの内容で重複している箇所の再検討
- (3) 患者からの暴力やセクシャルハラスメントに関する実習前オリエンテーションの時期と内容、担当者。また、それらを受けた学生に対するサポートシステムの構築
- (4) 聖路加国際病院新電子カルテシステムの操作方法に関するオリエンテーション内容

実習室委員会

1. 構成員

[委員長] 平林優子

[委員] 四本竜一、島田裕司、伊東美奈子、浅井宏美

2. 役割・職務

聖路加看護大学の学生が必要な看護技術を修得するために実習室の環境を整える。

- (1) 地下および 6 階実習室と教材が、学生の学習環境

- として整うように管理・運営する。
- (2) 実習室自己学習支援員を配置し、学生の自己学習支援を行えるように依頼・調整する。

- (1) 実習室使用頻度が高く、学生の自己学習時間の確保や支援員の在室場所が課題である。
- (2) 継続勤務が可能な自己学習支援員の確保が必要。
- (3) 今年度自己学習支援員の活用が前年度より少なかった。PR や積極的な関わりが必要
- (4) 災害時に使用される物品が多く、場所の明示、危機管理時の責任の所在・整備方法の確立

3. 活動内容 (表1・2参照)

4. 課題

表1 2010年度実習室委員会活動内容

活動項目	活動内容
実習室支援員の確保・支援業務依頼・日程調整・勤務管理・学内周知	原則週2回(火・木)の13~19時に各1名の支援員が活動ができるように調整した。掲示とメールで学内に周知した。
地下、6階の実習室インベントリー	3月11日(金)10:00~15:30、教員、学生アルバイト、自己学習支援員の計46名で実施。不要物品の整理、修理依頼・アーカイブへの移行含む。終了後の地震による持ち出し物品が多く、支援員・委員会教員で後日数日間を使って整備を続行した。
医療機器・教材の点検	①臨床工学士による医療機器の点検を依頼(7月、3月)、②蘇生・シミュレーター人形の点検を業者に依頼(2月)、③機器の充電、通電・作動点検を毎月確認(自己学習支援員による)
物品の修理・破損物の処理	年間を通じて実習室物品・教材の修理や破損物処理の窓口となる。
物品の貸し出し・実習室使用の調整	学内教員の教材・物品貸し出し表の作成(学内のどこで使用しているかわかるようにした)。外部および学生への貸出票(教務課保管)による管理。文化祭や病院の研修等の貸出しの相談・調整・準備
業者による清掃依頼・インベントリー時の棚・物品の清掃	業者への清掃依頼(8月、2月)(倉庫内ワックスがけ、ベッド、床頭台、棚扉や枠等)。インベントリー時(3月)に全棚内・教材物品類の清掃、ブラインド清掃依頼
全ベッドのリネンの洗濯・交換	8月、3月(2回)実施(震災により再度整備が必要だった)
実習室必要物品の購入・予算計上	各領域からの要望を聴取して予算計上。今年度実習室購入備品は、幼児モデル人形・摘便浣腸モデル・ベッドサイドテーブル・ワゴン等
実習室環境整備	①スクリーンの洗濯等これまで業務に入っていなかった整備を検討実施した、②ベッド整備、③日々の環境整備、⑤設備修繕上の連絡調整
実習室使用に関するアナウンス	①自己学習室マップの掲示とアナウンス、②実習室使用上のマナーの呼びかけ(掲示等)、③実習室に関連する情報のアナウンス
地震時の物品調達・片付け・整備	地震による帰宅困難者の宿泊のための物品貸出し・返却作業・洗濯・整備等、実習室物品の災害用の貸し出し、片付け

表2 2010年度実習室自己学習支援員による自己学習支援件数 (延べ人数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1年生	0	0	0	0	0	0	67	36	68	54	5	0	230
2年生	0	35	136	29	1	0	0	5	0	0	9	0	215
3年生	0	0	0	0	0	66	0	0	1	0	0	0	67
4年生	0	0	29	7	0	0	0	0	0	0	0	0	36
大学院	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	35	165	36	1	66	67	41	69	54	14	0	548

体育デー委員会

1. 構成員

- [委員長] 榎原あゆみ（3年生）
[副委員長] 添田桜（3年生）
[委員] 4年生：藤田祥子、白土聡美、
学士11：岩下ひとみ、横山仁美
学士13：揚村雄介、岩瀬和子
2年生：佐藤さやか、細川舞子
1年生：今井莉絵、澤田彩乃
学士14：安達麻衣、岩坂典子
[顧問] 大濱あつ子（特別顧問）、小口江美子、大橋久美子、進藤務

2. 役割

1) 体育デーの企画・運営

本委員会は学生委員が主体的に企画・運営を行う。教職員顧問は企画・運営のサポートを中心に行っている。

2) 体育デーの目的（学生作成の2010体育デーのしおりより）

- (1) 他の学年の人たちや先生方との親睦を深める。
- (2) 身体を動かし、気持ちの良い汗を流す。
- (3) 参加者の皆さんが思い切り楽しむ。

3. 活動内容

新入生委員勧誘を行いメンバーが揃った後、体育デーまでの期間の昼休み時間を利用し週1～3回、学生の自主的な話し合いのもとで体育デーの企画を行った。主な準備内容として、役割分担・種目決め・ルール決め・必要物品の準備に加え、各チームの参加者出場種目の決定・体育デーのしおりの作成と参加者への配布（学生全員、参加教職員）などを行った。

2010年度の体育デーは、6月2日（水）中央区総合体育館にて開催された。競技種目は、バレーボール・ポートボール・ドッジボール・台風の目・玉入れ・障害物競走・綱引き・チーム対抗リレーであった。

競技の結果は、1位：白チーム（4年・学士12回生）、2位：黄チーム（3年・学士13回生）、3位：青チーム（2年・学士14回生）、4位：赤チーム（1年・大学院生）であった。

体育デー当日は、あらかじめサポーターとして募集した学生とともに各種目の審判の実施、司会進行などを実

施した。教職員顧問は適宜ミーティングに参加し、学生の自主的な活動へのアドバイスや援助、教職員の出場種目の調整等を行った。また、本年度よりマナー委員によるマナー大賞も設けられ、学年全員がスタッフとして参加協力し、マナーがよく、かつよく活躍した1年生に贈られた。

4. 課題

- 1) 体育デーのしおりの配布範囲と配布方法についてあらかじめ委員会で確認を行い配布もれがないようにすること
- 2) 非常勤教員への連絡が遅くならないよう配慮すること
- 3) 年度が変わり役割変更する際は学生間の引き継ぎを綿密に行うこと（体育デー当日使用の物品の整理・保管、体育デー当日の改正点、会計報告書提出など）

5. 資料・データ 該当なし

学生支援推進プロジェクト

文部科学省 平成22年度「大学教育・学生支援推進事業」
学生支援推進プログラム

地域教育力を活かした学士力および GSH 向上プログラム
井部俊子（事業推進代表者）・菊田文夫（事業推進責任者）

1. 本取組の概要

本学が位置する中央区築地・明石町地区は、祭礼や季節行事等の組織的な運営のため、地域住民の世代間交流が積極的に行われている。そこで、このプログラムでは、本学の学生ひとりひとりが看護専門職業人として、また、よき市民として、アイデンティティを確立できるように、地域教育力を活かした活動を地域住民に支援いただきながら企画実施し、学部学生全体の学士力向上と本学の GSH (Gross Students' Happiness = 学生総幸福) 向上を目指す。

2. 本年度の重点的取組

昨年度に引き続き、専門職業人に不可欠なコミュニケーションスキルの獲得や、近い将来、職場や家庭で担うべき役割を果たすために必要とされる社会的責任感・倫

理観・自己管理能力を育むための取組を行った。そのための具体的な内容として、「地域住民との世代間交流、異文化交流を進めていく活動プログラム」と、就職活動に大きな寄与が期待できる「卒業生と在校生を繋ぐ縦の関

係づくりプログラム」および「応急処置・救命処置のトレーニングと日本救急医学会認定 ICLS コース資格取得支援プログラム」を盛り込んだ。

3. 本年度の活動プログラム

活動プログラムなど	監修	開催日時	参加者
救急・クリティカルケアセミナー	卯野木健 四本竜一	5月11日・13日 6月10日	40名
特別講演「新生児集中治療室の日々」	小黒道子	6月25日	34名
メディカルラリー	卯野木健 四本竜一	7月10日	50名
先輩が伝えたいルカ生への処方箋	中山久子	7月30日	28名
野外活動等で出会う、緊急時の応急処置講習会	卯野木健	12月18日	20名
第1回 ICLS コース	卯野木健 四本竜一	1月20日・29日	10名
第2回 ICLS コース	卯野木健 四本竜一	2月10日・19日	12名
クリティカルケアセミナー	卯野木健 四本竜一	2月12日	22名
「聖路加はっとストリート」制作支援	学生支援推進 プログラム事務局	4月号・6月号	
学生支援推進プログラムのホームページ更新	学生支援推進 プログラム事務局		

4. 課題

本年度は、本補助事業に協力いただいている地域住民や協同者の都合、ならびに、東日本大震災の影響により実施を見送った活動プログラムが複数あり、来年度に実施すべく、その準備を進めたい。さらに、来年度についても、学部学生の学事暦を考慮した活動プログラムの実施計画を立てるとともに、メールマガジンを定期的送信するなど、学部学生に積極的な参加を呼びかける広報活動にも力を注ぎたい。

の事前打ち合わせ、事後の報告反省会を行うので、看護教育会議では全体での課題の共有や、看護教育界、実践現場の新しい情報について相互に提供しあう。

3. 活動内容

会議を4月、7月、2月の3回開催した。病院からはメンバー紹介、看護部の方針、新人の採用計画、卒業生を含めた新人ナースの状況、病院の新規事業計画等、大学からは学生数、カリキュラムの年間計画（実習計画を含む）、実習における学生の状況、研究センターの活動等について、情報交換を行った。また、カリキュラムが2011年度から変更するにあたり、その説明を行った。

看護教育会議

1. 構成員

看護系教員全員、聖路加国際病院看護部長・副部長ならびにナースマネージャー全員

2. 役割・職務

主たる実習病院である聖路加国際病院の看護部と連携を図り、本学の看護教育の質の向上を図る。

個別の実習科目については、看護部および当該病棟と

4. 課題

相互に報告に終始しがちで、双方のスタッフが集まる貴重な機会を有効に使える工夫が前年度からの課題であったが、これは本年度も解決はされなかった。次年度は、討議するテーマを設定するなど工夫をしたい。

教育会議

1. 構成員

[司会] 菱沼典子学部長

[メンバー] 本学専任教職員、客員教授、兼任教授、
非常勤講師、臨床教員

[書記] 教務部 高橋

2. 役割

本学専任の教職員の他に、非常勤講師、臨床教員が一堂に会し、その年度の本学の活動内容を知ってもらうこと、また、意見交換を行い本学の教育の質の向上を目指す。

3. 活動内容

毎年年度末に1回開催している。2010年度は3月24日(木) 16:00~17:30に開催し、以下の内容で進められた。

(1) 理事長挨拶

(2) 学長挨拶

(3) 大学の状況報告

(4) 教育に関する意見交換

図書館の機能強化について論議された。

4. 課題

非常勤講師や臨床教員に本学の活動を知ってもらうよい機会である。しかし、平日の昼間という時間帯や今年度は東日本大震災の影響もあり、外部講師の出席者が少ない。

また、限られた時間の中で、それぞれの報告に時間がとられるため、十分な意見交換や発言の時間が少ないことが課題であった。そのため、報告事項は簡潔にまとめて、必要最小限の時間に収め、参加者の意見交換を行った。できるだけ多くの外部講師との意見交換をし、「本学の教育の質向上」に役立つ場とするかが今後の課題である。

看護学研究科

大学院収容定員に対する在籍者数 (2010.4 現在)

修士課程

学 年	収容定員	現 員 数
1 年	看護 : 15	23
	看護学 : 15	19
2 年	看護 : 15	26
	看護学 : 15	18
3 年		6
計	60	92 (153.3%)

博士後期課程

学 年	収容定員	現 員 数
1 年	10	11
2 年	10	17
3 年	4	27 (内留年者 17)
計	24	55 (229.1%)

大学院入学状況 (2010 年度入学者)

左欄：一般 右欄：社会人

		入学志願者									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士課程	看護学	4	0	18	8	2	0	2	0	26	8
	ウィメンズ	9	0	26	0	0	0	0	0	35	0
博士後期課程		3	2	0	7	1	0	0	0	3	9

		入学者									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士 課程	看護学	4	0	12	7	0	0	0	0	16	7
	ウィメンズ	8	0	11	0	0	0	0	0	19	0
博士後期課程		3	2	0	6	1	0	0	0	3	8

大学院修了者数

修士課程		博士後期課程 (学位授与)	博士後期課程 (単位取得後退学者)
看護学専攻	22 うち社会人5	7 (2)	2
ウィメンズヘルス・ 助産学専攻	15		

() 内は学位授与者のうち単位取得後退学後再入学し学位を受けたもの

大学院科目等履修者受け入れ状況

授業科目	単位数	履修者数	単位取得者数
がん看護学・緩和ケア特論Ⅲ	2	1	1
がん看護学・緩和ケア実習	6	1	1

研究生受け入れ状況

指導教授	研究生数
井部俊子教授	1
田代順子教授	2
及川郁子教授	1
松谷美和子教授	1

大学院受入状況

	修士課程			博士後期課程	博士後期課程 2次募集	研究生
	学内推薦	I 期	看護学Ⅱ期 ウィメンズ2次			
募集要項公開期間	2010年 6月～7月	2010年7月～ 2011年2月	2010年7月～ 2011年2月	2010年 7月～10月	2010年11月～ 2011年2月	2010年9月～ 2011年2月
願書受付期間	2010年7月2日 ～7月8日	2010年8月27日 ～9月2日	2011年2月10日 ～2月17日	2010年9月27日 ～10月1日	2011年2月10日 ～2月17日	2011年1月11日 ～2月10日
募集人員	若干名	㊦： 12 ㊧： 15	㊦： 3名 ㊧： 若干名	10	若干名	—
志願者数	㊦： 0 ㊧： 4	㊦： 24 社会人 4 ㊧： 18 社会人 0	㊦： 9 社会人 3 ㊧： 2 社会人 1	15 うち社会人 9	3 うち社会人 3	4 (継続3名を 含む)
受験者数	㊦： 0 ㊧： 4	㊦： 23 社会人 4 ㊧： 18 社会人 0	㊦： 9 (4.7倍) 社会人 3 ㊧： 2 社会人 1	15 うち社会人 9	3 うち社会人 3	—
合格者数	㊦： 0 ㊧： 4	㊦： 18 社会人 2 ㊧： 11 社会人 0	㊦： 7 社会人 3 ㊧： 2 社会人 1	9 うち社会人 7	3 うち社会人 3	—
補欠者数	0	㊦： 1名	0名	—	—	—
入学者数	㊦： 0 ㊧： 4	㊦： 16 社会人 2 ㊧： 10 社会人 0	㊦： 7 社会人 3 ㊧： 2 社会人 1	9 うち社会人 6名	3 うち社会人 3	4 (継続3名を 含む)

㊦：看護学専攻 ㊧：ウィメンズヘルス・助産学専攻

がんプロフェッショナル養成プラン

1. 構成員

[運営委員] 林 直子

[評価委員] 山田雅子

[インテンシブコース担当] 本田晶子

2. 役割・職務

本学では、大学院修士課程がん看護専門看護師コースにおいて、毎年4～5名の修了生を輩出してきた。本年度も連携大学および医療施設との教育連携を基盤とし、学生の専門性に応じた実務教育の強化を図った。本学、北里大学、慶應義塾大学による<南関東がん看護教育ト

ライアングル>による協働を整え、がん看護専門看護師教育の相互交流を強めた。インテンシブコースとして開講3年目を迎えたがん化学療法認定看護師コースの研修生27名に対し、連携大学の腫瘍内科専門医、がん専門薬剤師等の専門家による特別講義や臨床講義により、総合的な学習が展開できるよう努めた。また、がん看護専門看護師の臨床活動の支援、修了生を対象とした事例検討会やコンサルテーション事業の定期的な開催や、大学院修士課程において米国臨床看護師等との情報交換を図り、継続的な臨床実践の強化・支援に取り組んだ。

3. 活動内容と成果

1) 大学院修士課程がん看護専門看護師コースにおい

ては、臨床実習や実習カンファレンス、教育会議を通して学生のがん看護高度実践能力の向上やチーム医療の質向上を目指したインテンシブコース担当育の充実を図った。また、がん化学療法看護認定看護師教育課程として教育コース（600時間、受講者27名）を実施した。教育内容を洗練するために教育会議で評価、改善を図り、十分な教育環境を提供するよう努めた。

- 2) シミュレーションラボにおける化学療法看護演習のために演習プログラムに基づき、ラボ整備、共同演習を実施した。抗がん剤曝露に関しては、蛍光塗料などを用いた手技による曝露範囲の特定などを行い、抗がん剤の安全な投与管理、リスクマネジメント、スキル等の習得を図った。研修生のがん看護高度実践能力としてアセスメント、根拠に基づく実践力の向上を得た。演習による技術習得は、臨床実習の実地トレーニングに連動させ更なる技術獲得を図った。
- 3) インテンシブコースとして、がん看護専門看護師コース修了後認定審査を受けるcandidatesやがん看護専門看護師を対象にした事例検討会、CNSが主催するコンサルテーション事業の継続開催と評価を行い、がん看護専門職者の継続教育の強化を図った。また、10月末に、米国・メイヨークリニックの臨床看護師・看護管理者を招いて、大学院生、がん看護に携わる教員と日米のがん看護の臨床および研究の現状についてディスカッションを行った。

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム

「市民参画型ケアを推進する看護学若手研究者の育成」に関する委員会（PCC 若手研究者育成選定委員会）

1. 構成員

[委員長] 井部俊子、菱沼典子、麻原きよみ（9-1月サバティカル）、山田雅子、田代順子、堀内成子、研究支援室高木裕也、

[書記] 教務課中島薫

2. 役割・職務

2009年度末に日本学術振興会の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムに採択された。本プログラムの効果的な施行を協議、運用し、プログラムの目的を達成する

ために、2009年度末より委員会を設置した。

3. 活動内容

- 1) 派遣課題の募集に関する取り決めの策定と運用
募集要項の作成と募集を2009年度1回、2010年度2回行った。
- 2) 派遣課題選定に関する取り決めの策定と運用
選定基準の策定し、評価表による評価とそれに基づく採用者の決定を行った。
- 3) 若手研究者派遣のための学内の協力体制の醸成
助教が学内の教育業務等を離れるにあたって、学内の協力体制は不可欠であり、全ての教員に本プログラムの意義を伝えて、協力を得ている。
大学院生の派遣申請を推奨するため、情報周知や相談窓口での意欲喚起に取り組み、本事業によって研究者としての成長が得られるよう支援した。
- 4) 派遣活動の評価

本年度、日本学術振興会から実施状況とプログラムの有用性についてのヒヤリングを受けた。派遣課題については報告書の提出を義務付けているが、適正な公表と評価の必要性を認識した。

4. 課題

本学において、助教が長期間不在になるのは教育業務(実習指導)との関係で困難であり、また、看護界においては教員不足であって博士研究員のポジションにいる者はほとんどいないことから、長期間の派遣が難しい。

派遣修了後の情報共有と評価のシステムが不十分なので、次年度は早急に取り組む必要がある。また、学外への成果公表も課題である。

5. 資料（2009年度及び2010年度の2年分を一括掲載）

応募件数・採用件数一覧

	2009年度	2010年度 (第1回)	2010年度 (第2回)
応募件数	20	11	15
採択件数	10	7	11

※2009年度及び2010年度(第2回)の採択分は、次年度の派遣予定を含む数

2009年度派遣課題一覧

五十嵐ゆかり (博士研究員)	2010/3/7 ～2010/3/27	オーストラリア	①シドニー・トレシリアン家族ケアセンター及び移民局翻訳通訳サービス/Masako Shkara ほか ②シドニー・リバプール病院/Kyle Mortimer ほか ③メルボルン・ウィメンズヘルス多文化共生センター/Carmela Leracitano	外国人女性への出産ケア：医療機関と地域の取り組みの現状
マフトウファ (博士後期課程2年)	2010/2/13 ～2010/5/26	インドネシア	国立イスラム大学 Gatot Subroto 病院 Fatmawati 病院 Mayapada/Bella/Amelia 病院	Novice Nurses' Experience during Their First Six Month in Indonesia
加藤木 真史 (修士課程1年)	2010/3/14 ～2010/3/21	英国	11th St Mark's Enhanced Recovery Symposium (at St. Mark's Hospital in London)	術後回復を促進する早期離床プログラムの検討

2010年度派遣課題一覧

長松康子 助教シニア	2011/2/4 ～2011/4/6	①英国 ②米国	①マージーサイド・アスベスト被災者支援グループ/Mr. John Flanagan ②コロンビア大学/Dr. Richard Garfield	英国・米国における中皮腫患者に対する看護
小林真朝助教	2011/2/4 ～2011/4/7	米国	University of Washington School of Nursing Psychosocial and Community Health Professor Noel J. Chrisman	生活習慣特性を活用したコミュニティ支援プログラムの開発における CBPR の応用
伊東美奈子助教	2011/2/6 ～2011/4/6	米国	California Nurse Foundation Mentor Project Director, Anna Mullins California Nurse Mentor Project	看護師の離職率低下に貢献する効果的なメンターシッププログラムとは
イエニタ・アグス 博士後期課程1年	2010/7/10 ～2010/8/31	インドネシア	国立イスラム大学	Effectiveness of Health Education to Pregnancy Women to Reducing Maternal Mortality in Indonesia; a Baseline Survey
フリーダ・E・マデニ 修士課程1年	2010/6/14 ～2010/9/26	タンザニア	国立ムヒンビリ健康科学大学看護学部	Evaluation of Reproductive Health Awareness Program for Unmarried Adolescent in Urban Tanzania
上田直子 修士課程1年	2010/6/17 ～2010/6/29	米国	カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学研究科 (国際協働論演習)	日米比較による今後の日本の助産師裁量権拡大の検討
徳武郷子 修士課程2年	2010/6/17 ～2010/6/29	米国	カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学研究科 (国際協働論演習)	日本における preconception care の効果的な普及方法に関する一考察—e-learning を使用したプログラムの実施、評価を通して—
前田菜穂子 修士課程2年	2010/6/17 ～2010/6/29	米国	カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学研究科 (国際協働論演習)	産後出血の対応アルゴリズム作成
瀬戸山陽子 博士後期課程2年	2010/10/6 ～2010/10/10	米国	Health 2.0 San Francisco 2010	健康情報共有のための、Web2.0 技術の活用
北園真希 修士課程2年	2010/11/3 ～2010/11/22	米国	The International Conference on Perinatal and Infant Death Pregnancy Loss and Infant Death Alliance	妊娠中に子どもの死に直面した母親の死別プロセスにおける意思決定とその要因

看護実践開発研究センター

運営委員会

1. 構成員

- [センター長] 山田雅子
[研究科長・WHOコラボレーティングセンター長]
菱沼典子
[PCC 実践開発部門長] 亀井智子
[研究活動支援部門長] 森明子
[キャリア開発支援部門長] 松谷美和子
[WHOコラボレーティングセンター事務局] 田代
順子
[研究センター専任研究員] 小口江美子(11月末ま
で)、實崎美奈、八重ゆかり、田代真理、大畑美
里、本田晶子
[研究支援室係長] 高木裕也
[オブザーバー] 山口喜義事務局長

2. 役割・職務

看護実践開発研究センター運営委員会規定第3条に基づき、センター運営の基本方針に関すること、事業計画に関することなど、センター運営に関して審議した。

3. 活動内容

11回の運営委員会を開催し、主としてセンターの組織

改変およびセンター事業の推進について審議した。主な議題の詳細を表1に示した。

また研究支援の対象となった文部科学省及び厚生労働省の科学研究費による研究一覧を資料として添付した。表2には、客員研究員及び博士研究員とその研究活動の一覧を示した。

4. 課題

今年度は、研究センター組織の見直しに取り組んだ。見直しのきっかけは、昨年度、継続教育を拡大し、予算的にも大きな事業となってきたが、センターのそもそもの目的である市民とのパートナーシップに基づく新しい看護の創生について見えづらくなってきたこと、また、5つの部門と6つのはたらきについて系統だった説明がしにくいという意見が研究員から寄せられたことにある。教職員に対するアンケートなどを通して、1年間の議論を経て、3月末に2010年度からの組織の骨格が定まってきたところである。

新しい構成は、「PCC 実践開発」「研究活動支援」「キャリア開発支援」の3つの部門を立て、WHO コラボレーティングセンターの機能との連携を強化し、また、センターでのさまざまな情報を集約し市民向けも含めて発信していくための機能を「情報集約発信担当」として位置づけた。2010年度以降、組織図に従った機能の整理、運営委員会構成員の検討などを行い、組織再編の目的を実現していきたいと考えている。

5 資料・データ

表1 看護実践開発研究センター運営委員会各回の主な議題

回数	開催日	議 題
第1回	4月13日	センター組織について 組織変更に伴う規定等の改正について 客員研究員・博士研究員の承認 学生の実習あるいは研究受け入れに関する申請書について 2010年度センター事業における事業主の変更について 認定看護師教育課程細則改正(案)について
第2回	5月11日	研究活動支援担当業務案について 客員研究員・博士研究員の承認 学生の実習あるいは研究受け入れに関する申請書について
第3回	6月8日	「ルカ子母乳育児相談室」・「赤ちゃんがやってくる」の開催場所変更について 認定看護師教育課程規則改正について 大学院生対象研究助成について<安田記念医学財団> 博士研究員の承認

第4回	7月13日	博士研究員について 研究助成に関する委員会規程・審査基準・手順について センター事業における講師出勤簿兼請求書の導入について 来年度のセンター事業計画の検討
第5回	9月14日	研究センター事業 2011年度事業申請について
第6回	10月12日	研究センター事業について「研究センター利用のしおり」見直し・改定における修正案の検討 センター専任研究員の公募について 兼任研究員の承認について
第7回	11月9日	2011年度研究センター事業・聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」・予算（案）について
第8回	12月14日	2011年度研究センター事業・聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」・予算（案）について 聖路加・テルモ担当研究員の採用について 研究支援部門の目的と活動について 研究センター専任研究員 2011年度の人事について
第9回	1月11日	聖路加・テルモ担当研究員の採用について 2011年度聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」・予算（案）について 市民アカデミー・新健康カレッジ 来年度の方向性について 2010年度以降のセンター報告書について
第10回	2月15日	専任研究員の任期満了および再任について 2010年度センター報告書原稿依頼について
第11回	3月8日	次年度役割分担について 2010年度研究センター報告書について（依頼文、報告書フォーム、作成スケジュールの確認）

表2-1 専任・兼任研究員およびテマ一覧（文部科学省科学研究者） ○：専任研究者 *：部門長・担当

分類	氏名	代表・分担	研究テーマ	研究種目
PCC 開発	麻原きよみ	代表	保健師の倫理的実践に関わる自治体行政組織のエスノグラフィー	挑戦的萌芽研究
	有森 直子	代表	女性のリプロダクション健康課題の意思決定支援教育コンソーシアムとプログラム検証	基盤研究B
	飯岡由紀子	代表	女性生殖器系がんサバイバーのためのテーラーメイドケアの開発と評価	基盤研究B
	飯岡由紀子	代表	セルフトリートメントシステムの開発ーホルモン治療中の乳がん患者に焦点をあててー	挑戦的萌芽研究
	井部 俊子	分担	若年層における非正規雇用と社会参入に関する組織領域間の比較研究（研究代表者：原山哲）	基盤研究B
	江藤 宏美	代表	乳幼児の睡眠分析システム情報共有プラットフォームの構築	基盤研究B
	江藤 宏美	分担	現場変革に活かす新生児がリードするラッチングと母乳育児支援の効果検証（研究代表者：井村真澄）	基盤研究B
	江藤 宏美	代表	乳児睡眠のホームモニタリングを可能にする自動映像処理システムの開発	挑戦的萌芽研究
	及川 郁子	分担	小児医療における病院/在宅/地域をつなぐ高度実践看護師クリニックのシステム構築（研究代表者：片田範子）	基盤研究A
	大久保暢子	代表	慢性期脳血管障害患者の寝たきりを防ぐ背面開放座位ケアプログラムの開発	若手研究B
	大坂和可子	代表	がん体験者が伴走する Web 版乳がん患者サポートグループの開発	若手研究B
大隅 香	代表	妊産婦が安心できる助産師のワーク・ライフ・バランス実現に向けたアクションリサーチ	若手研究B	

PCC 開発	大森 純子	代表	新興住宅地の向老期世代を対象とした“地域への愛着”を育む健康増進プログラムの開発	基盤研究B
	小野 智美	代表	日帰り手術に向けての幼児の自律性を支援する看護介入プログラムについての効果研究	基盤研究B
	小野 智美	代表	大都市・都市部以外に居住する幼児の経皮水分蒸散量（TEWL）の基礎的調査	挑戦的萌芽研究
	梶井 文子	代表	在宅認知症高齢者のための学際的チームの連携強化を支援する評価システムの開発と検証	基盤研究B
	片岡弥恵子	代表	DV 女性と子どもの生き抜く力を支えるアドボカシープログラムランダム化比較試験	基盤研究B
	*亀井 智子	代表	長期テレナーシングによる在宅呼吸不全患者の憎悪予防効果の検証とガイドライン創生	基盤研究B
	*亀井 智子 梶井 文子 山本 由子	分担	都市部における世代間交流プログラム実践評価指標と視覚教育媒体の有効性の検証（研究代表者：糸井和佳）	基盤研究C
	小林 真朝	代表	生活習慣特性を活用したコミュニティ支援プログラムの開発と評価	若手研究B
	○實崎 美奈	代表	不本意に治療を中断する不妊症患者夫婦の要因分析：治療開始から1年後までの追跡調査	基盤研究C
	瀬戸屋 希	代表	精神科看護における家族ケアリストの開発に関する研究	若手研究B
	鶴若 麻理	代表	アジアの高齢者の終末期医療をめぐる事前指示に関する国際比較研究	若手研究B
	永森久美子	代表	長期的な子産み子育て力につながる「女性を中心としたケア」の実証	基盤研究C
	中山 和弘	代表	インターネット情報に翻弄される患者、家族を支援する看護職のためのeラーニング開発	基盤研究B
	長松 康子	代表	アスベスト関連相談に関する保健師向けガイドラインの構築と評価	基盤研究C
	野田有美子	代表	経口摂取に替わる栄養管理の導入を検討する患者・家族の意思決定支援ガイドの開発	研究活動 スタート支援
	林 直子	分担	オンライン学習と電子メール相談による子宮頸がんに対するリスクコントロールの促進（研究代表者：稲吉光子）	基盤研究B
	林 直子	分担	乳がん早期発見のための乳房セルフケア促進プログラムの開発と妥当性の検討（研究代表者：鈴木久美）	基盤研究B
	平林 優子	代表	慢性疾患幼児の在宅における療養行動発達支援を家族と協働する外来看護システムの開発	基盤研究C
	堀内 成子	代表	貴重児妊娠の不安を軽減するための就寝中胎動ホームモニタリングの実用化開発	基盤研究B
	堀内 成子	分担	日本人体験者のナラティブに基づくベリネイタル・ロスのケアガイドラインの開発（研究代表者：太田尚子）	基盤研究B
堀内 成子	代表	ローリスク妊産婦に対する過剰防衛医療の実態と回避方略	挑戦的萌芽研究	
御子柴直子	代表	代償期肝硬変における肝機能温存、発癌予防の栄養セルフマネジメントプログラムの開発	研究活動 スタート支援	
*森 明子	代表	妊娠を望む女性の気がかりとプレコンセプション・サポートの検討	基盤研究C	
○八重ゆかり	代表	看護ケア・エビデンス創出のための臨床研究と系統的レビューの基盤づくりに関する研究	研究活動 スタート支援	
山本 由子	代表	在宅高齢糖尿病患者のインスリン療法導入時評価指標の開発と映像媒体の利用効果	基盤研究C	

PCC 政策	井部 俊子	代表	わが国の病院に勤務する看護師の交替制勤務のあり方に関する研究	基盤研究B
キャリア 開発支援	麻原きよみ	代表	地域看護における体系的倫理教育ラダーの開発と評価	基盤研究B
	萱間 真美	代表	看護学の知識体系を構築するための質的研究方法を用いた学位論文指導プログラムの作成	基盤研究B
	佐居 由美	代表	安楽ケア実践力を育む看護基礎教育プログラムの構築	基盤研究C
	*田代 順子	代表	看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基盤学習支援の開発と評価	基盤研究B
	菱沼 典子	代表	少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発	基盤研究B
	深谷 計子	代表	日米の看護師国家試験問題のテキスト理解と語彙：使用言語の難易度の妥当性	基盤研究C
	*松谷美和子	代表	看護学士号をもつ新人看護師に求められる臨床実践能力開発のための学習モデルの研究	基盤研究B
	柳井 晴夫	代表	臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験（CBT）の開発的研究	基盤研究A
柳井 晴夫	分担	医療の高度化に伴う看護系大学の高大接続問題－看護職志望者の適正と大学入試－（研究代表者：倉元 直樹）	基盤研究B	

表2-2 専任・兼任研究員および研究テーマ一覧（厚生労働科学研究費補助金）

○：専任研究員

分類	氏名	代表・ 分担	研究テーマ	研究種目
PCC 開発	萱間 真美	分担	精神障害者の退院促進と地域生活のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究（研究代表者：伊藤順一郎）	障害者対総合研究事業
	梶井 文子	分担	高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究（研究代表者：葛谷雅文）	長寿科学総合研究事業
	梶井 文子	分担	チームによる効果的な栄養ケア・マネジメントの標準化をめざした総合的研究（研究代表者：吉池信男）	長寿科学総合研究事業
	○山田 雅子	分担	チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性向上に関する研究（研究代表者：井上智子）	地域医療基盤開発推進研究事業
PCC 政策	萱間 真美	分担	精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島正）	障害者対総合研究事業
	萱間 真美	分担	新しい精神科地域医療体制とその評価のあり方に関する研究（研究代表者：安西信雄）	障害者対総合研究事業
	萱間 真美	代表	精神疾患の受療中断者や未治療者等を対象としたアウトリーチ（訪問支援）の支援内容等の実態把握に関する研究	厚生労働科学特別研究事業
	○山田 雅子	分担	在宅療養支援の実態把握と機能分化に関する研究（研究代表者：武林亭）	厚生労働科学特別研究事業

内閣府特命担当大臣表彰

聖路加看護大学看護実践開発研究センターが行っている社会貢献事業のうち「子育て・家族支援」に関係する活動が、文部科学省の推薦により内閣府特命担当大臣表彰を受けた。「赤ちゃんがやってくる」「ルカ子母乳育児相談」「天使の保護者ルカの会」「多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会」等、People-centered Careの活動や本学教職員の昼夜を問わない努力、そして看護研究が社会に貢献していることが認められたもので、とてもうれしい出来事である。

2010年11月24日、総理大臣官邸で行われた表彰式に、センター長山田雅子教授、堀内成子教授、亀井智子教授が出席し、大臣より表彰状と副賞の盾を授与された。

表2-3 専任・兼任研究員および研究テーマ一覧（その他の研究課題）

○：専任研究員 *：部門長

分類	氏名	代表・分担	研究テーマ	研究種目
PCC 開発	*亀井 智子	代表	St. Luke's College of Nursing geriatric care project, Innovation of intergenerational day program in urban community in Japan,	Takayama Foundation, Switzerland.
	*亀井 智子	代表	認知症高齢者と家族のライフレビューにもとづく「メモリーブック」作成過程の心理的効果の検証:認知症高齢者と家族の継続面接による自己肯定感、抑うつの変化に焦点を当てて	聖路加看護学会看護実践科学研究助成金
	萱間 真美	代表	精神科地域医療におけるアウトリーチケア提供の新しいモデル構築に関する研究	医療科学研究所委託研究
PCC 政策	及川 郁子	代表	医療ニーズの高い障害者等への支援策に関する調査	厚生労働省障害者総合福祉推進事業
	*亀井 智子	代表	特別養護老人ホームにおける看護職のケア管理に関わる調査研究事業	厚生労働省老人保健事業推進費等補助金
	萱間 真美	代表	精神障害者退院促進支援事業	東京都中央区事業委託
	○山田 雅子	分担	訪問看護の需給推定に関する研究事業（研究代表者：村嶋幸代）	厚生労働省老人保健事業推進費等補助金
	○山田 雅子	代表	24時間訪問看護サービス提供の在り方に関する調査研究事業	厚生労働省老人保健健康増進等事業
PCC 国際	○山田 雅子	分担	療養通所介護の多機能化に関する調査研究事業（研究代表者：齋藤 訓子）	厚生労働省老人保健健康増進等事業
	*田代 順子	代表	「我が国の国際保健協力人材の継続的確保に関する研究」国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究：国際看護・助産専門職キャリアパスモデル開発	国際医療研究開発費「国際医療協力研究分野」

表2-4 客員研究員および研究テーマ一覧

○：専任研究者 *：部門長

分類	氏名	研究テーマ	学内共同研究者	所属
PCC 開発	小林 紀子	母乳育児支援	堀内 成子	小林紀子助産院
	横塚 夏奈	母乳育児に対するケア	堀内 成子	助産師 横塚夏奈
	石井 慶子	周産期女性への心理的サポート(不妊・喪失)、グループ・ファシリテーター養成	堀内 成子	お空の天使 パパ&ママの会
	堀内 祥子	女性への心理的サポート、心的外傷後ストレス障害(PTSD)	堀内 成子	聖路加看護大学
				ペリネイタル・ロス研究会
	太田 尚子	日本人体験者のナラティブに基づくペリネイタル・ロスのケアガイドラインの開発	堀内 成子	静岡県立大学
	大久保菜穂子	市民向け健康講座の展開	○山田雅子 *森 明子 菱沼典子	新宿鍼灸柔整 専門学校
小松 浩子	リンパ浮腫ケアステーション(乳がん術後上肢リンパ浮腫の自覚症状の測定用具の開発と妥当性検証)、サポートプログラム	○大畑美里	慶応義塾大学看護医療学部 聖路加国際病院 (非常勤看護師)	

	矢ヶ崎 香	リンパ浮腫ケアステーション（乳がん術後上肢リンパ浮腫の自覚症状の測定用具の開発と妥当性検証）、サポートプログラム	○大畑美里	慶応義塾大学看護医療学部 聖路加国際病院 (非常勤看護師)
キャリア 開発支援	小松 浩子	がん看護事例検討会	○本田晶子	慶応義塾大学看護医療学部 聖路加国際病院 (非常勤看護師)
	矢ヶ崎 香	がん看護事例検討会	○本田晶子	慶応義塾大学看護医療学部 聖路加国際病院 (非常勤看護師)
	沼田 美幸	訪問看護認定看護師教育に関する研究	○山田雅子	社団法人 日本看護協会
	内田千佳子	退院調整看護師養成のためのプログラム開発	○山田雅子	訪問看護パリアン
	廣岡 佳代	退院調整看護師養成のためのプログラム開発	○山田雅子	訪問看護パリアン
	吉田 千文	退院調整看護師養成のためのプログラム開発	○山田雅子	千葉県立保健 医療大学
	福田 裕子	退院調整看護師養成のためのプログラム開発	○山田雅子	あおぞら診療所 新松戸

表2-5 博士研究員および研究テーマ一覧

部 門	氏 名	研究テーマ	共同研究者
PCC 開発	新福 洋子	タンザニアの母親たちの出産体験に基づく 家族立会いガイドラインの作成	堀内 成子

People-Centered Care (PCC) 実践開発部門

1. 構成員

〔部門長〕 亀井智子

〔開発担当事業主〕 片岡弥恵子(赤ちゃんがやってくる、堀内成子(ルカ子母乳育児相談・天使の保護者ルカの会・天使の保護者ルカの会; グリーフカウンセリング、森明子(ルカ子ウイメンズヘルスカフェ)、大坂和可子(乳がん女性のためのサポートプログラム)、大畑美里(リンパ浮腫ケアステーション)、及川郁子(子どもの健康、知ろう、考えよう)、山本由子(高齢者と家族へオンリーワンの「思い出帳(メモリーブック)」作りプロジェクト)、梶井文子(介護者のためのリフレッシュアートプログラム)、亀井智子(多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会・高齢者のための転倒骨折予防実践講座・出張介護講座)

2. 役割

本年度より研究センター内の組織改正があり、昨年度まで「看護ケア部門」に属していた本部門は、PCC 実践開発部門開発担当、政策担当、国際担当の3つ担当に細分化された。

- 1) 開発担当は、看護実践開発研究センターの一部門として、People-centered health care にもとづく新たな看護サービスモデルの研究的開発、および看護モデルの実践提供を通じて、市民主導型看護ケア(PCC)のあり方を探求する。
- 2) 専任・兼任研究員が事業主となりさまざまな世代にある人々のさまざまな健康課題に焦点をあて、ナースクリニックの場において、広く市民に看護モデルの実践を提供するとともに、研究成果を蓄積し、根拠のある看護を開発・創生する。
- 3) 各事業主が学部生、大学院生、専門職、他大学の教員等を対象として、看護の実践開発を理解する等の目的で教育の機会、および場として各事業を提供する。

3. 活動内容

1) 事業の推進

看護ケア部門の各事業は、年度計画のもとに計画的に実施している。

開催回数、参加者数は表1の通り、年間2,766名の市民を対象に事業が展開された。

2) 開発担当ミーティング

本担当に属する研究事業全体の内容や課題、および様々な対象者に安全に事業を展開するための方法について話し合う担当ミーティングを1回開催した。

3) Quality control

本部門に属する事業の質を維持・向上するために「構造-実践過程-成果」の各要因から事業の質評価

を行っている。また、安全に看護実践を提供するために、事業開始時に各事業ごとに安全対策指針を策定し、それにもとづく安全対策を実施して各事業を展開した。

4. 課題

研究者と市民との協働により、看護実践を研究開発する上で、最も重要な要素はコミュニケーションと安全管理であると認識している。今年度は共有すべきインシデントはなく、各事業の安全対策指針が功を奏したと考えられた。引き続き、事業者間のミーティングを通して情報交換等を継続したい。

表1 PPC 開発担当が実施した事業

事業名	事業主	構造要因	プロセス要因			アウトカム	
		会場場所	事業主以外の学内従事者	学外従事者	プログラム	開催回数	年間参加者数
赤ちゃんがやってくる	片岡	交流ラウンジ	院生-演習として履修 学部生-性教育ゼミ履修者 大学院生・学部生ボランティア	助産所助産師	父母と子どもが参加して新生児を家族に迎えるためのクラスを提供	8	177
ルカ子母乳育児相談室	堀内	相談室、家庭訪問	学部生 - 看護研究Ⅱ	客員研究員	授乳中の母子の育児相談(授乳、眠り、離乳食など)	90	245
ルカ子ウイメンズヘルスカフェ	森	ぼるかルーム	教員	子宮筋腫・子宮内膜症体験者の会	不妊、筋腫、内臓症、出生前診断など、テーマを決めて学習と話し合い	8	65
			認定看護師教育課程(不妊症看護コース)研修生 演習として2回を企画・運営	不育症友の会等自助グループ			
天使の保護者ルカの会	堀内	交流ラウンジ ミーティングルーム	院生一研究として参加 学部生-家族発達Ⅱ、卒業研究 他の大学、看護職の研修	客員研究生 日本手芸普及協会 カラーセラピー	周産期喪失を経験した家族のお話会(小集団)	7	64
天使の保護者ルカの会; グリーフカウンセリング	堀内	ミーティングルーム		客員研究員	周産期喪失を経験した家族個人のカウンセリング	10	18
乳がん女性のためのサポートプログラム	大坂	交流ラウンジ ぼるかルーム 本館	学部生 大学院生ボランティア	聖路加国際病院プレストセンター・オンコロジーセンター看護師 プレストクリニック築地看護師	・小グループに分かれて体験を分かち合う会と専門職を招いた学習会を開催 ・先輩患者が他の患者の相談にのるピアサポートボランティアを開催	9	556
リンパ浮腫ケアセッション	大畑	相談室		後藤学園 聖路加病院プレストセンター	アセスメントとリンパ浮腫マッサージ	45	179
子どもの健康、知ろう、考えよう	及川	交流ラウンジまたは1号館	院生、学部生	各テーマの専門家(講師) 企画者として中央区の保育園看護師・保健師・病院看護師・養護教諭など	子どもの健康のテーマについて、講義により学習の機会と、参加者の質問や話し合いの時間を持つ	5	151

介護者のためのリフレッシュアートプログラム	梶井	2号館内		ボランティア 看護師	介護者のリフレッシュとピアサポートを支えるためのクラス	3	9
高齢者とご家族へオンラインワンの「思い出帳(メモリーブック)」作りプロジェクト	山本	2号館内	院生 課題研究	ボランティア	生い立ちから現在までの生活や仕事に関する思い出帳を作成しながら振り返り、生き方の意味づけをサポートする	20	5組、 延べ 40名
聖路加和みの会	亀井	ぼるかルーム 大学芝生 地域散策	院生 ボランティア 学部生-生涯発達看護論Ⅱ実習 学部生-老年看護ゼミ演習	地域ボランティア 区書道連盟 NPO アロマセラピーサポートセンター キルトリーダーズ東京	都市部在住の小中学生と高齢者の世代間交流を促進し、高齢者にとっては子ども世代への知恵と文化の伝承、子どもにとっては高齢者理解を促進し、互恵的ニーズを充足する看護ケアを提供	36	712
転倒骨折予防実践講座	亀井	1号館アーツ	院生、学生ボランティア	桜美林大学 浦和大学 大東文化大学 神奈川県立保健福祉大学 横浜市立大学 看護師 るかなびヘルスボランティア	1コース6回制 1回目:心身アセスメント、問診、転倒歴、転倒リスク、QOL、骨密度、開眼片足立ち時間、10メートル歩行速度などの測定、運動プログラム 2～4回目:健康教育+運動プログラム 5回目:初回から12週後 6回目:初回から53週後	6	実5 延べ 150
出張介護講座	亀井	地域の指定場所へ出向く	-	中央区シニアセンター	依頼者と相談の上決定	7	400

キャリア開発支援部門

キャリア開発支援部門は、最新の知見を得る方法、知見を活用する方法、それらをさまざまな角度から検討して妥当な見解を引き出す方法、新しい知見を看護学生・

看護職者間・協働者間で共有する方法、看護ケアを必要とする人々に新しい知見を還元していく方法を身につけ、看護専門職者としてのアカウントビリティを高めていくことを支援する部門である。

1. 構成員および役割・職務

表1 キャリア開発支援部門構成員

構成員	役割	職務
松谷美和子	部門長	部門の統括
井部 俊子	コース責任者	認定看護管理者ファーストレベル講習
八重ゆかり	専任教員	認定看護管理者ファーストレベル講習
森 明子	コース責任者・主任教員	不妊症看護認定看護師教育課程
實崎 美奈	専任教員	不妊症看護認定看護師教育課程
林 直子	コース責任者	がん化学療法看護認定看護師教育課程
本田 晶子	主任教員	がん化学療法看護認定看護師教育課程
大畑 美里	専任教員	がん化学療法看護認定看護師教育課程
山田 雅子	コース責任者	訪問看護認定看護師教育課程

田代 真理	主任教員	訪問看護認定看護師教育課程
福田 裕子	専任教員	訪問看護認定看護師教育課程
平良 智子	職員	部門の事務
福田 昌	職員	部門の事務

2. 活動内容

今年度は認定看護管理者ファーストレベル講習と、昨年同様の3領域での認定看護師教育課程を開講した。また、ナーススキルアップ講座として看護専門職者へのコンサルテーション、看護事例検討会、看護英語文献読解クラス、退院調整看護師養成プログラムのほか、新規事業として不妊症看護認定看護師、訪問看護師を対象としたスキルアップセミナーを開催し、多くの看護専門職者の学びの場となった。今後も看護職者のよい方向へ変え

たい・変わりたいというニーズに応えていきたい。

3. 課題

認定看護師教育課程の受講生の確保が課題であった。看護職者に受講希望があっても、一定のまとまった研修を受けることのできる人員の余裕が職場に十分でないことが予定数の確保を困難にしているものと考えられる。今後は、どのようなコースを開設し、当該部門の目的を達成していくかを早急に検討する。

4. 資料・データ

表2 2010年度キャリア開発支援部門：ナーススキルアップ講座

講座名	開催数	受講者数	修了者数
英文献を読もう！パートⅠ－基礎編	2コース（10回）/年	19	—
英文献を読もう！パートⅡ－構文理解強化コース	2コース（10回）/年	14	—
語り合おう！看護マネジメント —看護管理者のための‘サポートグループ’—	6回/年	76	—
退院調整看護師養成プログラムと活動支援	1コース（5回）/年	43	42
がん看護 事例検討会	9回/年	52	—
精神看護 事例検討会	4回/年	126	—
看護管理コンサルテーション	随時（予約制）	4	—
緩和ケアコンサルテーション	随時（予約制）	1	—
在宅ケアコンサルテーション	随時（予約制）	0	—
不妊症看護認定看護師ポストコース	1回/年	54	—
訪問看護スキルアップセミナー	4回/年	46	—
合計		435	

表3 2010年度キャリア開発支援部門：認定看護管理者講習・認定看護師教育課程

教育課程	開講期間	受験者数	合格者数	受講者数	修了者数
（認定看護管理者） ファーストレベル講習	8/23～9/29	97	90	90	90
（認定看護師教育課程） 不妊症看護コース	6/1～2/28	12	12	12	12
がん化学療法看護コース	6/1～2/28	32	28	27	27
訪問看護コース	6/1～2/28	25	22	25(3)	24
合計		69	62	64	63

研究活動支援部門

1. 構成員

〔部門長〕 森明子

〔部門員〕 八重ゆかり、高木裕也、田口瞳

2. 役割・職務

市民の健康生活の向上に資する看護の実践開発を促進するため、本学の教員ならびに研究員、大学院生の研究活動を支援する。

3. 活動内容（活動実績は表1参照）

(1)～(6)の活動のため、メール会議を含む3回の委員会を開催した。

- (1) 研究助成金情報の提供
- (2) 文部科学省及び厚生労働省の科学研究費の申請及び経理等手続きの支援
- (3) 研究員及び大学院生に対する研究コンサルテーション
- (4) 研究員及び大学院生に対する研究倫理コンサルテーション
- (5) 研究助成に関する選考委員会規程ならびに審査手順に基づいた選考
- (6) その他

5. 資料・データ

表1 研究支援部門活動実績（2010年度）

活動内容	件数	活動方法・手段等
(1) 研究助成金情報の提供	27	学内メールによる周知
(2) 科研費の申請・経理手続き	58※	科研事務の諸ルールに基づく
(3) 研究コンサルテーション	50	研究計画に応じた対面相談
(4) 研究倫理コンサルテーション	0	今年度は実施せず
(5) 研究助成に関する選考	1	研究助成に関する選考委員会規程に基づく

※文部科研：本年度交付39件+21年度繰越3件+他機関分担分10件=52件；厚生科研6件；計58件

WHOコラボレーティングセンター

1. 構成員

〔センター長〕 菱沼典子

〔事務局〕 国際研究部門代表 田代順子

〔委員〕 長松康子、小黒道子、眞鍋裕紀子

4. 課題

- 1) 研究助成金情報提供の迅速化と情報入手のためのリソース（ウェブサイト）紹介に努めた。今後はこれを維持促進するとともに、実際にどれだけ助成金の申請と獲得につながったかの把握がなされるべきであろう。
- 2) 科研事務の課題として、研究費を公正かつ効率的に使用できるよう研究の計画的な遂行を支援すること、及び手引きの整理に努め、迅速・正確に各種手続きが進められるように業務を見直すことを検討していきたいと考える。また、センター機能と関わる獲得研究費であっても科研費ではない場合、支援ニーズに答えられていない点も課題である。
- 3) 今年度受けた研究コンサルテーションを通じて把握した学習ニーズに対し、臨床研究に関連した勉強会などの開催を検討していきたい。
- 4) 研究倫理コンサルテーションの担当者を決める必要がある。
- 5) 本学の大学院生が研究助成に応募するにあたり、学内選考を必要としたため、その選考にあたる組織および運営に関して必要な事項を定めた規程および審査手順を作成した。これで運用してみてとくに大きな問題はなかったと考える。

2. 目的

第5期センター目標（Terms of Reference）と事務局活動内容

- 1) ミレニアム開発目標達成と小児高齢化社会に貢献する看護実践モデルを開発する。
- 2) PHCにおける看護のリーダーシップを推進する。
- 3) 個人・家族・地域のエンパワーメントを目指し、

エビデンスを用いて、実践の開発と研究を行う。

4) PHCにおける看護・助産についての教育と実践向上するため、研究とシステム改革を支援する。

上記看護開発協力センター目標達成に向け、(1)センターの活動（PCC 開発研究）の情報の統括と、(2)WHO との連携活動を行う。

3. 活動内容

(1) 2009年度研究活動:WHO/WPRO への報告:2009年度本看護実践開発センターでの市民主導型ケア開発研究を WPRO、WHO 本部へ年次報告書提出し、Web で公開した(資料1)。

(2) Global Network 2年毎総会が7月27日・28日にブラジル・サンパウロで開催され、事務局より田代と長松が出席した(資料2)。

(3) 国内広報として日本看護協会出版会「看護」WHONEWS に隔月に連載。Web で公開(資料2)。

(4) 国際保健協力研究:2010年度:国際医療協力研究委託費研究(22指定6)の「国際保健協力人材の継続的確保に関する研究」の分担研究「国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究」を進め、本年度研究成果を報告した。

国際看護・助産学コンソーシアム、ワークショップを2010年8月28日に「国際看護学・助産学修士生のキャリアパス」をテーマに開催した(資料3)。

(5) 看護助産強化への教育を通しての貢献

インドネシア・イスラム大学からの博士課程院生:博士3年1名、2年2名の留学生の支援。

タンザニア、ウィメンズヘルス助産学修士2年1名は課程を修了した。

(6) WHO 看護開発協力センター創設20周年を記念し、大学創立記念行事として1月21日に記念講演とシンポジウムを企画準備し、予定通り終了した(資料4)。

4. 課題

(1) WHO/PHC 看護開発協力センターとして市民主導型看護実践研究の集約機能は、事務局業務の範疇を超え、継続的課題である。

(2) 看護助産を強化のための国内国際保健看護・助産学コンソーシアム形成は継続課題

5. 資料・データ

資料1) WHO 看護開発協力センターホームで公開中。

資料2) WHONEWS 一覧:WHO 看護開発センター Web 上および「看護」(日本看護協会出版会)で国内広報中

資料3) 長松康子、田代順子、小黒道子、眞鍋裕紀子・(2011). 国際保健協力看護・助産人材の継続的確保に関する研究—国際看護・助産専門職キャリアパスモデル開発(第1報:ワークショップ報告). 聖路加看護大学紀要. 37号. 10-14ページ. 聖路加看護大学.

資料4) 田代順子(2011). WHO プライマリヘルスケア(PHC)看護開発協力センター開所20周年記念講演. 学園ニュース No.294. 聖路加看護大学.

	執筆者	テーマ	「看護」
2011年3月	長松 康子	WHO、HIV 感染者の人権擁護の呼びかけ	第63巻3号
2011年1月	小黒 道子	持続可能な妊産婦死亡とミレニアム開発目標	第63巻第1号
2010年11月	田代 順子	グローバルネットワーク第8回国際学術大会	第62巻13号
2010年9月	眞鍋裕紀子	障害を持つ子どもたちの権利	第62巻11号
2010年5月	小黒 道子	DVは世界的な社会問題	第61巻第6号

るかなび運営会議

1. 構成員

[委員長] 山田雅子

[委員] 菱沼典子、森明子、小口恵美子(11月まで)、佐藤晋巨(図書館)、高木裕也(研究支援室)、

真部昌子(コーディネーター)、佐藤直子(コーディネーター)

[ボランティア] 高橋恵子

2. 役割・職務

1) るかなびの活動計画を立案する。

- 2) るかなびの運営に必要な企画・手順等を検討し、問題があれば改善策を講ずる。
- 3) 研究センターの機関事業として機能するよう、活動を推進する。

3. 活動内容

- 1) 11回の運営会議を開催し、運営に関する所持を検討、決定した。
- 2) 活動資金の獲得のため、骨密度測定を有料（1回500円）とし、中央区との連携事業を検討し、白楊祭にバザーを出展するなどした。

4. 課題

今年度は、るかなびのコーディネーターおよび事業主が交代し、相談は骨密度測定に限って有料化するなど、これまで研究事業費に頼った運営を行ってきたことについて、自ら活動資金を得る方法を模索することが最大の課題となっていた。

骨密度の有料化については、これによって相談者数が減少したかどうかは明確ではないが、骨密度測定を希望している人に集中して利用してもらい、測定者延べ数目標とした人数に達することができた。また、中央区と連携して事業展開ができないかを模索し、協働ステーション中央が企画する協働事業提案に応募したが、行政サービスとの明確な差別化が図れないことから、採用には至らなかった。白楊祭のバザーには、市民ボランティアも積極的に参加し、大雨にもかかわらず、活動資金の一部を得ることができた。

来年度から3年間、テルモ㈱より研究資金を提供されることが決定し、心からありがたいと感じている。これからも、それに甘んずることなく、自分たちで可能な限り運用していく術を引き続き検討していきたい。

また、るかなびは、教育機能としても活用されており、学部生のコミュニケーションを学習する場、大学院生の研究フィールド、認定看護師教育課程研修生の一般市民を対象としたコミュニケーション技術を学習する場として定着してきている。

今後は引き続き相談技術の向上、センター機関事業としての役割の明確化が課題である。

聖路加・テルモ新健康カレッジセミナー 聖路加市民アカデミー

1. 構成員と役割

[企画・広報・運営] 小口江美子

[企画・広報] 羽田正直(4-5月)、吉川英夫(6-12月)

2. 活動内容

2008年度より社会貢献事業として一般市民向けの健康支援セミナー「聖路加・テルモ新健康カレッジ」を開講し、自分自身の体を理解し上手く健康を管理調整してより良く生きることを目指して、市民に学びの場を提供している。「新健康」のコンセプトは、「無病息災ではなくても、たとえ持病があっても、上手くそれをコントロールしながら、心身ともにより良く心豊かに生きる」ことを目指す、という本学の日野原重明理事長の提唱によるものである。2010年度は聖路加国際病院の医師や大学教授などにより1回の市民アカデミーの講演と3回の新健康カレッジセミナーが開催された。

- 1) 聖路加市民アカデミー（2010年5月29日土曜日 13:00-17:00開催）

近年、補完・代替療法の一つである音楽療法やアロマセラピーが、統合医療として世界各国の今日の医療の中に導入されつつあるが、今年度は新しい試みとして、それらが日本ではどのような現状なのか、将来の展望はどうであるのかについて焦点を当て、実演を含めたプログラムが企画された。共催団体は、聖路加看護大学、テルモ株式会社、聖路加国際病院音楽療法研究会、日本アロマセラピー学会の4団体であり、これもまた新しい試みであった。4団体は7回の準備委員会を重ね、開催1年半前より入念に企画・運営を検討し、当日のプログラム実施に臨んだ。

講演テーマと講師は、講演①臨床での音楽療法の必要性：日野原重明氏（聖路加国際病院理事長・日本音楽療法学会理事長）、講演②メディカルアロマセラピーとは？～その過去、現在、将来展望まで～：塩田清二氏（昭和大学医学部解剖学教授・日本アロマセラピー学会理事長）、講演③精油を安全に使用するには：青暢子氏（昭和大学医学部生化学教室）、講演④精油の不眠症への応用：山田朱織氏（16号整形外科院長）、講演⑤音楽療法について：伊藤マミ氏（聖路加国際病院緩和ケア音楽ケアサービス室）、講演⑥

不妊治療での音楽療法とその効果：菊田文夫氏（聖路加看護大学健康教育学准教授）で、講演の合間には音楽療法やアロマセラピーの実演も行われ、参加者は両療法を実際に体験した。講演後は、会場の参加者ほぼ全員が音楽を聴きながらアロマトリートメントを体験するという市民参加型の「音と香りのハーモニー」プログラムが実施された。

応募者や招待者を合わせて215名の参加者があり、演者、実演者、運営ボランティア、運営スタッフ等を含めると約300名が本講演に関わった。「音楽・アロマと両方の良さがでて勉強になった。こういったコラボは新鮮で興味深い」（40代女性）、「アロマと音楽療法とても興味深くおもしろかった。講演だけでなく、実演があったのがとてもよかった。体験するとより心に残ると思う。」（30代女性）などの感想が寄せられた。参加者によるアンケート回答の結果は聖路加看護大学紀要（2010）に掲載した。

- 2) 新健康カレッジセミナー（2010年 ①7月17日、③9月18日、④10月23日いずれも土曜日14:00-15:30

開催）

「もっと知ろう、自分のカラダ！」全3回シリーズ①ストレスや生活習慣に由来する高血圧とその対策：西裕太郎氏（聖路加国際病院循環器内科医長）、②ストレスに伴う抑うつ・身体症状とその対策：太田大介氏（聖路加国際病院心療内科副医長）、③関節の痛み：星川吉光氏（聖路加国際病院整形外科部長）：参加人数はそれぞれ①50名、②54名、③65名であった。

新健康カレッジセミナーは、年度を重ね、回を重ねる毎に単回参加者・継続参加者共に増え、地域住民に確実に定着した様子である。全3回参加者は24名、2回参加者は13名で、全回継続参加者には昨年同様セミナーに役立つ聖路加グッズが記念品として贈られた。

3. 課題

参加希望者との連絡を密にし、参加を支援する。継続的に開講し、さらなる定着を図る、など。